

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520151

研究課題名(和文) 小説と映画のあいだー川端康成と小津安二郎の芸術における 日本 ー

研究課題名(英文) Between the roman and the cinema -Japan in the art of Kawabata Yasunari and Ozu Yasujiro-

研究代表者

田村 充正 (Tamura, Mitsumasa)

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：30262786

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)： 小説と映画 という大きな研究課題のうち、(1)日本を代表する小説家川端康成と映画監督小津安二郎の二人に焦点をあわせた比較研究および(2)川端康成の小説とこれを原作とした映画作品の芸術間翻訳の研究に取り組んだ。

成果として、論文二本を専門誌(査読有り)に掲載し、講演を二回おこなった。この二回の講演のうち、2014年9月17日、18日にフランス・パリで開催された「川端康成21世紀再読 モダニズム、ジャポニズム、神話を越えて」(日本近代文学学会、国際交流基金主催)という国際シンポジウムにおいて「川端康成「山の音」と小津安二郎監督作品の詩学における「日本」というテーマでの発表を仏語で行った。

研究成果の概要(英文)： Sur le sujet <le roman et le cinema> j'ai etudie les oeuvres de Kawabata Yasunari et d'Ozu Yasujiro. J'ai ecrit deux articles et j'ai participe au colloque international sur le theme <Rerire Kawabata au 21e siecle - modernisme et japonisme au-dela des mythes> a l'universite Paris Diderot le 18 septembre 2014.

Le Grondement de la montagne de Kawabata et Le Printemps tardif d'Ozu ont en commun la description de la vie quotidienne d'une famille dans les annees suivant la guerre. Ces deux oeuvres mettent ainsi en scene le spectacle de l'ordinaire, la beaute qui emane d'une vie quotidienne, invitant le lecteur comme le spectateur a repenser sa propre quotidienete.

研究分野：比較文学

キーワード：小説 映画 川端康成 小津安二郎

1. 研究開始当初の背景

近年、学問ジャンルの境界を越えた研究の必要性和需要が高まる中、比較文学という学問はその当初から境界越えによる研究を前提としていたが、その境界とは空間的な国境の境界であるばかりでなく、芸術ジャンルの境界でもあった。翻訳論は比較文学研究を支える重要な柱のひとつであり、それは言語内翻訳、言語間翻訳、芸術間翻訳の三つの分野に分かれる。本研究においては、このうち小説と映画という異なるジャンルにおける芸術間翻訳の問題に取り組んだわけであるが、言葉と映像は人間の思考を構成する重要な要素であり、その関係性の解明は人工知能の創造過程においても避けては通れない課題であろう。

2. 研究の目的

上記の課題を芸術分野における問題として、言葉の芸術(小説)と映像の芸術(映画)という異なるジャンルの優れた芸術に通底する原理を探ることを目的に、本研究は着手された。またこうした普遍的な芸術原理を探求しようとする問題と同時に、戦後70年を迎えようとする本課題の研究年にあたって、日本という国はどのような国で、今後どのような方向に進もうとしているのかという問いかけは、国外においても、国内においてもその解答が迫られている。こうした両方の課題に答えるべく、本研究は「小説と映画のあいだ 川端康成と小津安二郎の芸術における日本」という題名がつけられた。

1968年に日本人として初めてノーベル文学賞を受賞し、日本近代文学が世界文学へ参入する道を開いた小説家川端康成と、聖なる映画としてその作品が海外の映画批評家たちによる精緻な映像分析と深い文化的アプローチを積み重ねられてきている映画監督小津安二郎を比較研究の対象として絞り込み、実証研究および芸術理論の両面から明らかにすることを目的とした。

川端康成は昭和10年から、小津安二郎は昭和27年から、ともに鎌倉に在住し、この地を舞台にしたいくつかの代表作品を手がけている。この二人の作家の交流については、川端康成が昭和12年に戦後の小津作品の原型と評される「淑女は何を忘れたか」を林房雄と試写会で鑑賞し、小津は鎌倉転居以降、「彼岸花」や「秋日和」の原作者となる里見弴ら鎌倉文士たちとの交流を深めたことが文献から明らかになっている。本研究ではまず、現在あまり知られていないこの二人の作家の具体的交流について、川端康成記念会ほか鎌倉市教育委員会をはじめとする関係各位のご協力を得て、調査を行う。

3. 研究の方法

研究計画を下記四点に整理し、実証研究においては川端康成記念会および鎌倉市教育委員会、茨木市立川端康成文学館などの協力

を仰ぎながら進める予定を立てた。

(1)川端康成と小津安二郎という両作家の具体的交流の調査

鎌倉を終の棲家とした川端康成という小説家と小津安二郎という映画監督の、具体的な人物交流の軌跡を調査する。

これには本研究の遂行者が所属している川端康成学会(日本学術会議協力団体)と近い関係にある川端康成記念会に協力をお願いし、まずは川端側から、まだ公開整理されていない資料の蒐集にあたる。

川端康成の没後40年となる平成24年に、川端康成学会は鎌倉市教育委員会と共催で記念の講演、シンポジウムを含む研究大会を開催した。(6月10日、於・鎌倉市生涯学習センター)今後も鎌倉市教育委員会と川端康成学会は何らかの形で鎌倉と関わりながら研究会、例会等をこの地で地道に開催していく点で合意を得ることが出来たため、鎌倉人の協力を仰ぎながらフィールド・ワークを行い、資料の蒐集に努める。

また、小津安二郎監督の映画に直接関わられた方々もご高齢になっており、作品製作の貴重な証言等の資料の蒐集と整理は本研究の重要な課題のひとつになる。

(2)川端康成の小説を映画化(映像化)した40あまりの作品の資料調査と作品分析

川端康成の小説を原作とする映像資料およびそれらに係る文献の蒐集を行う。

「2.研究の目的」の項目に記したように、川端作品は30作近くの小説が40回を超えて映画化されており、この現象は海外にも及んでいる。しかしこれまで映画化された作品を調査すると、「浅草紅団」(この作品は1930年帝国キネマ版と1952年大映東京版がある)、「虹いくたび」(大映、1956)、「東京の人」(日活、1956)、「女であること」(東京映画、1958)などの所在不明の作品がいくつかあり、これらの調査を行わなければならない。

文芸映画として映画化された川端作品は日本映画史の発展の歴史と重なる点があり、調査は日本映画史の空白箇所を埋める役割も果たす可能性がある。

(3)小津安二郎監督作品の映像と原作(脚本)の資料調査と海外研究論文の蒐集および映像作品分析

上記の課題については、デヴィット・ボードウェル著(杉山昭夫訳)『小津安二郎 映画の詩学』(青土社、2003)および蓮實重彦著『監督小津安二郎【増補決定版】』(筑摩書房、2003)の2つの著作が貴重な参考文献となるが、本研究で進めたいのは小説を原作としてもつ映画作品および映画作品とその脚本(台本)との関係性の検証にある。すなわ

ち先に記述した「晩春」(原作・広津和郎「父と娘」)、「宗方姉妹」(原作・大佛次郎)、「彼岸花」(原作・里見弴)、「秋日和」(原作・里見弴)などの作品と、脚本が資料として入手できる作品が本研究の対象になる。

小津作品をめぐる海外の評価はドナルド・リチー著(山本喜久男訳)『小津安二郎の美学 - 映画の中の日本』(フィルムアート社、1978)をはじめとして、イギリス、アメリカ、フランスの研究が主立っているが、本研究の遂行者の本来の専門であるロシア語圏において、例えばレフ・クレシヨフやセルゲイ・エイゼンシュテインがその創立に参加した全ロシア国立映画大学等の資料をもとに、ロシアにおいて小津安二郎作品がどのように評価されているかという調査も行う。

(4)上記を 小説と映画のあいだ という大きなテーマのもとで、両作家の日本の伝統芸術との共通性、継承性に焦点をあわせた論文(著作)の作成

本研究では先行研究を視野におさめながらも、あくまで小説と映画の作品そのものに即した分析を中心に据えながら、その内容と方法において二人の作家を結ぶ 日本 伝統文化との関係性を明らかにすることに努める。

抽象概念を紡ぎ出す言語芸術の小説と、具体的な映像で表現する映像芸術の映画とでは、根本的な差異があることは言うまでもない。しかし、言葉による叙述と、映像による叙述という物語の叙述のレベルでは両者は共通項を持つ。小説でいう、物語内容()と物語構成()の問題は、映画でも物語(story)と構成(editingあるいはmontage)の問題として、作品創造の根幹をなしている。物語論で検討される 語りの視点 の問題は、映画ではカメラワーク、つまり客観的ショットと主観的ショット、あるいはショットサイズやカメラアングルの問題と重なるであろう。

このように物語内容ばかりでなく、それぞれの技法、形式に注目しながら、日本を代表するこの二人の作家の、小説と映画のあいだに横たわる芸術ジャンルの差異そして両者を結ぶ 日本的 という修飾語の意味する中味を検証する。

4. 研究成果

明確な研究成果としては、次の項目で記載した論文と著作、研究発表の中で明らかにしたが、上記に挙げた目標に届かなかった面も多々あり、今後これら諸課題に結論を出すべく研究を継続していきたい。

研究計画課題(1)については、川端康成記念会会長に一次資料参照の依頼を行い、川端小津往復書簡等の資料があることは判明しているが、その参照許可はいまだ得られておらず、継続調査中である。すでに刊行されて

いる両作家の日記などをもとにした具体的な交流については下記論文の中で整理した。

研究計画課題(2)は、同じ研究課題をもつ研究者と協力して研究を進めているが、その成果の一部は下記論文において発表した。

研究計画課題(3)は、2014年にパリで開催された川端をめぐる国際シンポジウムに参加し、研究発表を行うという成果を得られた。ここで知己を得た海外の研究者たちと論文資料の調査に取り組んでいる。

両作家を通して 日本の伝統芸術の共通性、継承性を考察するという研究計画課題(4)の大きな課題については、小説や映画以外の分野の文献を渉猟しながら、いまだ結論を得るには至っておらず、今後明らかにすべき課題として残っている。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

田村充正 小津映画の様式
「翻訳の文化/文化の翻訳」第10号別冊、
静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会、
2015年3月、p.p.27~68

田村充正 川端康成「美しさと哀しみと」
小説と映画のあいだ
『川端文学への視界29』銀の鈴社、2014年6月、p.8~30(査読あり)

田村充正 「山の音」研究史
『川端康成作品論集成 第八巻 山の音』
おうふう、2013年11月、p.463~481

田村充正 川端康成「山の音」と小津安二郎監督『晩春』 小説と映画のあいだ
『川端文学への視界28』銀の鈴社、2013年6月、p.102~125(査読あり)

[学会発表](計2件)

田村充正 川端康成「山の音」と小津安二郎監督『晩春』の詩学の中の 日本
Le Japon poétique Le Grondement de la Montagne et le Printemps tardif d'Ozu
Yasujiro
日本近代文学会・国際交流基金、2014年9月18日、パリ・ディドロ大学(フランス)(仏語)

田村充正 川端康成「美しさと哀しみと」
小説と映画のあいだ
茨木市立川端康成文学館主催講演会、2013年8月25日、茨木市立男女共生センター(大阪府茨木市)

[図書](計2件)

田村充正、スティーヴ・コルベイユ 『映画の視覚性』静岡大学人文社会科学部、2015年3月、pp.176

田村充正（編集）『川端康成作品論集成
第八巻 山の音』おうふう、2013年11月、
pp.481

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田村 充正 (TAMURA, Mitsumasa)

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号： 30262786